

**書評 中西僚太郎・関戸明子編:近代日本の視覚  
的経験 絵地図と古写真の世界**

著者	湯澤 規子
雑誌名	地理空間
巻	1
号	2
ページ	162-164
発行年	2008
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00151348">http://hdl.handle.net/2241/00151348</a>

ている。こうした言説と連動して、第7章ではロレーヌでの鉱工業の衰退と産業転換が論じられている。その中で、鉱工業衰退に伴って採用された産業転換政策ではロレーヌのヨーロッパ中軸地帯への近接性や、交通の要衝に位置する点が注目されており、こうした利点を活かす形で自動車や物流拠点の形成などが図られていることが事例を通じて明らかにされている。

こうした産業転換政策は必ずしも全ての地区で成功するわけではなく、労働力の一部は国外へ流出している。第8章は、ドイツ・フランス・ルクセンブルク・ベルギーにわたるグランドリジョン（ザール・ロル・ルクス国境地帯）に着目して、国境を越えた人口流動を通勤、買い物、観光の3側面から考察している。とくに通勤流動においては、ルクセンブルクは低い失業率や高賃金などを背景としてロレーヌなどから多数の労働者を通勤者として吸引していることが示されている。終章においては、これまでの議論に基づきながら EU を中心とした統合ヨーロッパにおいて国境地帯が抱える課題と将来像が簡潔にまとめられている。

以上のように、本書はアルザスとロレーヌという国境地帯を対象として、丹念な現地調査にもとづいて文化的・社会的・経済的な側面からみた地域間結合や地域連携の実態をまとめている好著といえる。現在ヨーロッパで進行している地域変化の実例を丁寧に調査し、数多くの図表を用いて具体的に議論を進めており、その資料的価値のみならず、学問的価値を率直に高く評価したい。とりわけ、複数の事例地域内において主要テーマが設定され、多様な側面から地域結合や地域連携の姿を理解できる点を評価する。

ただ、こうした多様な側面からの議論は両地域の共通性と差違を考察し、また、現在におけるヨーロッパの他の国境地帯と比較する上で、逆に読者の視点を拡散させてしまう危険性がある。願

わくは、アルザスとロレーヌ両地域を統一した項目で比較する箇所を設けて両者を比較することを通して、より明瞭に拡大 EU における国境地帯の変化や、国境を越えた地域連携のあり方を議論して欲しかった。「序章」と「終章」において全体を見渡した考察がなされているが、可能であれば共通の項目（人口などの社会属性や経済特性）を比較する部分があっても良かったのではないだろう。

いずれにせよ、本書を通じて EU 拡大の中で進展する国境を越えた活発な人的・物的・経済的交流や情報交換、また、行政や民間企業による地域連携の実態を広く理解することが可能である。EU やヨーロッパ各国をフィールドもしくは研究対象とする研究者はもちろんのこと、教育、行政に携わる方々にも是非ともお勧めしたい一冊である。

（伊藤徹哉）

## 文 献

市村卓彦 (2002) : 『アルザス文化史』人文書院。

中西僚太郎・関戸明子編 : 『近代日本の視覚的経験 絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版、2008年11月刊、195p.、2,600円（税別）

「古地図は、大地に刻まれた人間の歴史の記録であるとともに、それぞれの時代の人間が、どのように世界をとらえてきたかという世界観ないしは世界認識の反映であるといえる」。織田武雄がその著書『地図の歴史』の冒頭で掲げた上記の言葉を借りるならば、本書は近代という時代、さらにはその時代に生きた人々の世界認識を鳥瞰図、民間地図、古写真を通して解明しようとした意欲作である。

P・D・A・ハーヴェートに依拠して地図の歴史を紐解くと、小地域の地誌の詳細を掲載した図(トポグラフィカル・マップ)の発展過程は、絵師による風景画から絵地図(ピクチュア・マップ)へ、さらに測量師による近代地図(カルトグラフィー)への移行と見ることができる(矢守1984)。既往の研究が絵地図と近代地図とを切り離して分析してきたことに対し、本書に一貫する独創的な視点の一つは、絵地図から近代地図への変遷を連続的視野から検討したことにある。例えば、本書が鳥瞰図に着目した意図は、それが絵と地図のどちらに属するかという問いが無意味であることを示すにとどまらず、むしろ近代移行期の諸相を解明するためには絵画と地図との中間に位置づけられる絵地図にこそ着目すべき重要な意味があると示唆することにあつたと思われる。「真景図」を日本画の伝統と西洋的視点を併せ持つ風景画の一潮流と位置づける本書の指摘に着目するならば(17p)、本書の問題意識は近代日本における日本の伝統と西洋の影響の関係を問う布石としても重要であろう。

本書の構成は以下の通りである。

- 第Ⅰ章 描かれた植民都市－近代札幌の「風景」(山田志乃布)
- 第Ⅱ章 近代地方都市図の展開－富山・金沢の民間地図(山根 拓)
- 第Ⅲ章 熱海温泉地の鳥瞰図の特色と表現内容(関戸明子)
- 第Ⅳ章 明治・大正期の松島を描いた鳥瞰図(中西僚太郎)
- 第Ⅴ章 明治四三年の群馬県主催連合共進会と前橋市真景図(関戸明子)
- 第Ⅵ章 昭和初年の千葉市街地を描いた鳥瞰図(中西僚太郎)
- 第Ⅶ章 大正・昭和前期の職業別明細図－「東京交通社」による全国市街図作

成プロジェクト(河野敬一)

第Ⅷ章 地誌と写真帖(三木理史)

第Ⅸ章 リーフレットからみる満州ツーリズム(荒山正彦)

上記の構成にみるように、本書において近代日本の地域として取り上げられた事例は、植民都市「札幌」、植民地「満州」、近代地方都市「富山・金沢」・「前橋市」・「千葉市」、温泉地「熱海」、景勝地「松島」と多岐にわたり、いずれも近代という時代の特徴やその意味を再検討するための重要な要素を含んでいる。主たる史料に目を向けると、鳥瞰図(主に真景図)、民間都市図、職業別明細図、地誌と写真帖、リーフレットなど、当時における様々な視覚的メディアが用いられており、その詳細な分析を通して描かれた具体的な地域像は秀逸である。既往研究において比較的多く言及されている鳥瞰図を取り上げるだけでなく、学術的研究としては従来ほとんど着目されてこなかった民間地図や写真帖、リーフレットなどへの行き届いた目配りは、近代日本における地域を多面的に描き出すことを可能にするとともに、新たな研究の方向性を提示するものとなっている。

タイトルに見るように、本書が示した研究の新たな方向性は、当時におけるメディアの分析を試みることを通して近代日本の「視覚的経験」を追究しようとした点に求められる。近年、社会史的研究において歴史認識の主体研究で用いられる「まなざし」という概念が「開拓使の眼差し(9p)」、「市民大衆のまなざし(34p)」として登場し、さらに絵師である松井天山、民間地図作成主体である東京交通社や商工者などの作成意図や空間認識への言及を総括して「視覚的経験」と換言したことによって、本書の魅力は読者へ存分に伝えられている。さらに望むとすれば、絵地図を描かせる人、描く人、見る人、つまり、視覚的経験の主体は誰か、そしてその主体によって近代日本の地域像は

どのように描き分けられるのかを意図的に整理することによる議論の深化が期待される。

本書は2007年に刊行された『近代日本の地域形成 歴史地理学からのアプローチ』（海青社）に続いて、日本地理学会・近代日本の地域形成研究グループによる共同研究から生まれた成果である。1999年度に開始された近代日本の地域形成研究グループの共同研究は、1994年度に始まった近代日本の地理学談話会から発展したものであり、2001～2004年度に日本学術振興会科学研究費補助金（近代日本における国土空間・社会空間の編成過程に関する歴史地理学的研究、基盤研究（A）（1））、2003年～2006年度に（近代日本の民間地図と画像資料の地理学的活用に関する基礎的研究、基盤研究（B））などの交付を受けながら、着実にその成果を实らせてきた。作成された報告書および学会における合評会、シンポジウム開催などによって、当該研究グループから発せられる「近代とは何か」、「なぜ近代日本の地域形成なのか」、「近代日本を如何に描くか」という問いから多くの刺激を受け、新たな研究展望を見いだすきっかけを得たのは私だけではないはずである。

地域の地誌的情報を伝える手段として、測量に基づいて記号化、抽象化された近代地図の味気なさは対照的に、絵師の世界観や作成意図などの「任意表現（117p）」が許容された絵地図や古写真の世界からは当時における人々の視覚的経験の豊かさを読み解くことができる。本書が提示したこのような視点を地理学における意義として問うならば、近代という時代に着目した独自性とは別に、「抽象的・物理的空間としての空疎化されてしまった地域に、内実を取り戻し、主体にとっての意味のある「場所」として見つめ直そうとする人間主義的アプローチ（矢守1984）」にも広く通ずるところがあるように思われる。

（湯澤規子）

## 文 献

織田武雄（1943）：『地図の歴史』講談社。  
矢守一彦（1984）：『古地図と風景』筑摩書房。

ダグラス・ボッティング著（西川 治・前田伸人訳）：『フンボルトー地球学の開祖ー』東洋書林。2008年10月刊、410p.+62p., 4,800円（税別）

本書は、1973年に刊行された Humboldt and the Cosmos の日本語訳である。刊行当時から、フンボルトに関心をもつ人々に注目され、愛読していた日本人も数多かった名著といえる。遅ればせながらではあるが、フンボルトを知る最良の手引き書が、没後150周年にあたる2009年を目前にして日本語訳されたことを喜ぶたい。

一般読者を想定したフンボルトの伝記としては、これまでにガスカール『探検博物学者フンボルト』（白水社、1989年）がある。これに本書が加わったことで、多彩な側面をもつ知の巨人フンボルトが、日本の読者にとっても包括的かつ容易にアプローチできる存在になった。2つの本を比べると、ボッティングのそれは原著出版年が古いものの（あるいは古いゆえに）、多面的で詳細な伝記的事実を知らせてくれる。読者が最初にとるべきスタンダードな入門書といえる。このことは、原著の出版が広く世界的に歓迎され、すでにドイツ語訳（1974年）やフランス語訳（1988年）があること（訳者によればスペイン語訳もあるそうである〔評者未見〕）でも明らかであろう。

さらに本書は、詳細である反面、とかく無味乾燥になりがちな伝記の弊をまぬかれている。出生から幼年、青春、壮年、老年、死去と、90年の長きにわたる生涯を描きながら、単調におちいることなく生彩な記述に満ちている。これは、フンボ